

## 重い栄光 「日本被団協のノーベル平和賞」

日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）ノーベル平和賞の受賞に思うこと。  
その長い忍従の時を超えて訴え続けてこられた関係者の皆様のご苦勞に敬意を表しま  
す。

長い苦しい草の根運動が核のタブーの危機の最中にやっと花ひらいた朗報でした。  
授賞の理由の中には学ぶべきことが煮詰まっています。切々と訴えの文脈を整理して選考  
者の真意に迫ります。（以下は原文を組み替えてあります。見出しは私が付け加えたものです。）

### 第1部、授与理由全文を読む

#### 1、授与理由

①ノルウェー ノーベル委員会は、2024年のノーベル平和賞を日本の組織「日本原水爆被害者団体協議会」（日本被団協）に授与することを決定した。「ヒバクシャ」として知られる広島と長崎の原子力爆弾の生存者たちによる草の根運動は、核兵器のない世界の実現に尽力し、核兵器が二度と使われてはならないことを証言を通じて示してきたことに対して平和賞を授ける。

②広島と長崎の地獄の炎を生き延びた人々の運命は、長く覆い隠され、顧みられずにきた。（\*1956年、地元の被爆者団体は太平洋での核実験の被害者（第五福竜丸ビキニ環礁被爆事件等）とともに日本原水爆被害者団体協議会を結成した。この名称は、日本語で被団協と略され、日本で最も大きく、最も影響力のある被爆者団体となった。（日本原水爆被害者団体協議会へのオマージュが表現されている）（\*）、この詳細は第2部を参照してください。）

③日本被団協は、世界に核軍縮の必要性を訴え続けるため、何千もの証言を提供し、決議や世論への訴えを行い、代表団を毎年、国連や様々な平和会議に派遣してきた。

④1945年8月の原爆投下を受け、核兵器の使用がもたらす壊滅的な人道的結果への認識を高めるための世界的な運動が起こり、メンバーたちはたゆまぬ努力を続けてきた。次第に、核兵器の使用は道徳的に容認できないという強力な国際規範が形成されていった。この規範は「核のタブー」として知られるようになった。広島と長崎の生存者であるヒバクシャの証言この大きな文脈において唯一無二のものである。

（核のタブーの規範形成において証言が唯一無二のものとなっている。規範形成には個人の証言という個の運動が原点になっている。個人的な献身が核のタブーを形成した。）

⑤アルフレッド・ノーベルのビジョンの核心は、献身的な個人が（個人的な献身が世界の）変化をもたらすことができるという信念である。ノーベル平和賞を日本被団協に贈るにあたってノルウェーノーベル委員会は、生存者たちが、肉体的苦痛や辛い記憶にもかかわらず、大きな犠牲を払った経験を生かして平和への希望と関与を育むことを選んだことをたたえたい。

⑥彼ら歴史の証人たちは、それぞれの体験を語り、自らの経験をもとにした教育運動を展開し、核兵器の拡散と使用への差し迫った警告を発することで、世界中に幅広い反核機運を生み出し、それを強固なものにすることに貢献してきた。ヒバクシャは、筆舌に尽くしがたいものを描写し、核兵器が引き起こす、理解が及ばない痛みや苦しみを我々が理解する一助になっている。

⑦そうしたなかでノルウェー・ノーベル委員会は、一つの心強い事実を確認した。それは、80年近くの間、戦争で核兵器は使用されてこなかったということである。日本被団協やその他の被爆者の代表者らによる並外れた努力は、核のタブーの確立に大きく貢献した。（核のタブーとは核兵器の使用を二度と認めてはならないという国際的規範。この規範のゆえに80年近く戦争での核兵器使用は防ぐことができた。）

⑧いつの日か、私たちのなかで歴史の証人としての被爆者はいなくなるだろう。しかし、記憶を残すという強い文化と継続的な取り組みで、日本の新しい世代が被爆者の経験とメッセージを継承している。彼らは世界中の人々を刺激し、教育している。それによって彼らは、人類の平和な未来の前提条件である核のタブーを維持することに貢献している。

（記憶の継承は思い起こさせる原動力となる。貢献していることが具体的に二つ挙げられている。①反核運動を強固にし世界に核タブーの機運を確立したこと。②新しい世代に核タブーの運動を継続していることである）

⑨2024年のノーベル平和賞を日本被団協に授与するという決定は、アルフレッド・ノーベルの遺言にしっかりと根ざしている。今年の賞は、委員会が過去に核軍縮と軍備管理の推進者に授与した栄えある平和賞のリストに加わる。

## 2、授与の背景、現状への警告がある

（ところが、今、）この核兵器使用のタブーがいま、圧力の下にあることを憂慮する。

（核のタブーという規範が圧力によって侵されようとしていることを憂慮、核のタブーが危機に瀕死している。ロシアによる核兵器使用の脅しが国際的な規範である核のタブーに圧力をかけている。今こそ被爆者の声が必要なのだとノーベル平和賞が主張している）

核保有国は核兵器の近代化と改良を進め、新たな国々が核兵器の保有を準備しているように見える。現在起きている紛争では、核兵器使用が脅しに使われている。人類史上、今こそ核兵器とは何かに思いをいたすことに価値がある。それは、世界がこれまでに見た中で最も破壊的な兵器だということである。

来年は、米国製の原爆2発が、広島と長崎に住む推定12万人を殺害してから80年を迎え

る。その後の歳月に、これに匹敵する数の人々がやけどや放射線障害により命を落とした。今日の核兵器は、はるかに強力な破壊力を持つ。何百万人もの人々を殺し、気候に壊滅的な影響を及ぼし得る。核戦争は、我々の文明を破壊するかもしれない。

### 3、ノーベル平和賞の矜持

2024年のノーベル平和賞は、人類のために最大の貢献をした人をたたえるというアルフレッドノーベルの願いを満たすものである。

2024年10月11日、オスロにて

## 第2部 受賞の理由の考察、背景について筆者の見解

### 1、田中熙巳さんのスピーチの追加

ノーベル平和賞の授賞式で日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）を代表してスピーチされた田中熙巳さんは、日本政府が原爆の犠牲者に国家補償をしていないことを繰り返し、又、予定していた原稿にはなかった以下の発言を盛り込んだ。

「もう一度繰り返します。原爆で亡くなった死者に対する償いは、日本政府は全くしていないと言う事実をお知りいただきたい。」と締め括った。

#### (1)あえて強調したのはどんな思いからなのか。

講演者が体験することであるが、壇上に目に立つと、時として予定外の発言を「何らかの力で言わされること」がある。それは本音であり、真実であることが多いのだが、公の場では発言を控えていたことでもある。日本政府の原爆犠牲者に対する冷ややかな姿勢に対して80年近く鬱積されてきた日本被団協の心の内を吐露したのだと私は思う。

田中さんはスピーチ後の談話の中で「原爆被害の責任を誰も取らないなら、核兵器を使っても良いと言う前例になりかねない」「戦争犠牲者に対する国家補償は日本だけでなく、国際的な問題であるとして全世界で関心を持ってほしい」という願いから繰り返したと言う。

#### (2)国際的な反応

この発言に対してノルウェーの政党代表の一人は「世界が見るスピーチで国家補償に触れるのは、大変重要で良いシグナル。より良い平和にもつながります」と評価している。

「国家に戦争の責任をきちんと取らせる事は、未来に同様のことを起こさせないための重要な防波堤になる。」として田中さんの発言の重さを指摘る学者もいる。これは「戦争被害受忍論」（国の非常事態下で起きた被害は、国民が等しく我慢しなければならない）への警告でもあると思う。

### 2、日本政府が原爆被害者の方々にとった姿勢

#### (1)被爆者に対する差別偏見はなぜ起きたのか

生き残った被爆者の実態は1945年から7年間公にされていなかった。占領軍（DHQ）に沈黙を強いられていた。更に2年あまり日本政府にも問題にされなかった。それゆえに差別され偏見を持たれ孤独と病苦と生活苦を味わってこられたのである。原爆被害者に対する差別偏見が生み出されたのは国民に知らしめなかったからである。政府の責任が大きい。公開しておけば差別は起きなかった。公開すれば補償の問題に発展すること、また米国に対する原爆投下責任を問うことにも躊躇せざるをえなかったのだろう。

## (2)第五福竜丸の被爆

国民に知れ渡るようになったのは1954年3月1日アメリカが太平洋ビキニ環礁で行った水爆実験で、多量の「死の灰」によって日本のマグロ漁船「第五福竜丸」の乗組員23名が被爆した、いわゆる三度目の核被害である。無線長・久保山愛吉さんが9月23日死亡。同時に被爆した船は1422隻あった（日本政府調査）

「第五福竜丸」は被爆し、乗組員は火傷、頭痛、嘔吐、目の痛み、歯茎からの出血、脱毛等と戦いながら自力で3月14日焼津港に帰還した。こんな被害に遭いながらなぜ救助を求めなかったのか。船長が救助を求めるとアメリカ軍から狙われ沈没させられると考えたのか、政府がアメリカから圧力に屈して黙っていたのか。分からない。謎が残る。

焼津港についてびっくりした船長の妻が、乗組員の火傷症状について東大医学部に連絡した。15日乗組員は東大付属病院に行った。この頃白黒テレビが普及しており私も毎日ニュースにしがみついて経緯を見守った。ラジオからは久保山愛吉さんの名前が幾度も幾度も流れていた。悲しい事件である。忘れられてはならない。（詳細はウキペディアに詳しく掲載されている）現在生存者は一人である。

東京都立「第五福竜丸展示館」前に立つ久保山愛吉さん直筆の訴えのある記念碑（原爆の被害者はわたしを最後にしてほしい）



## (3)この事件を契機として原水爆禁止の活動が始まった。

1955年8月6日第一回原水爆禁止世界大会が広島市で、翌年長崎市で開かれ、その時に日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）が結成された。

以下は田中熙巳さんのスピーチの一部です。

「生きながらえた原爆、被害者は歴史未曾有の非人道的な被害を再び繰り返すことのないようにと、2つの基本要求进行掲げて運動を展開してきました。1つは日本政府の「戦争の被害は国民が受忍しなければならない」との主張に抗い、原爆被害は、戦争を開始し遂行した国によって償わなければならないという運動。2つは、核兵器はきわめて非人道的な殺戮兵器であり、人類とは共存させてはならない、速やかに廃絶しなければならないという運動です。この運動は「核のタブーの形成」に大きな役割を果たした事は間違いありません。」（中略）

この活動により1957年「原子爆弾被害者の医療に関する法律」（被爆者健康手帳の交付）、1968年「原子爆弾被害者に対する特別措置に関する法律が制定」（数種類の手当てを給付）がなされた、しかしそれらは社会保障制度であって、国家補償は拒まれたままになっている。

#### (4)遅かった受賞

遅かった（日本被団協）のノーベル平和賞受賞

（日本被団協）のこのような動きに対して政府関係者の目線は冷たいものであったと感じる。とうのは、今回のノーベル平和賞受賞はサプライズであったと言われている。一面では喜びのサプライズであったことは確かであるが、（日本被団協）のノーベル平和賞は再三ノミネートされていたにも関わらず実現していなかった。それは日本政府が消極的であったからだと思われる。今回のサプライズは、現在の世界の状況が核戦争の危険を孕んだ限界状況にきている危機感から「核のタブー」を世界に発信しなければならないと世界の賢者が考えたから実現したものであると私は考えている。話はそれるが、政府がノーベル賞受賞の機会を妨げたのはこれが初めてではない。時は1901年に遡る。

#### (5)受賞を阻まれた北里柴三郎

ノーベル賞が創設されたのは1901年、その第1号にノミネートされた中に北里柴三郎がいた。ノーベル医学・生理学賞の受賞との見方が強かった。しかし、受賞したのは同僚のドイツ人ベーリングであった、彼は北里柴三郎より後にコッホの門弟となりコッホから北里柴三郎と共同研究をするように指示を受けていた。

では、なぜ北里柴三郎が受賞できなかったのか。詳しくはベストピア第399-400号「北里柴三郎年代記」を参照してください。）肝要にまとめると次の通り。

##### ①北里柴三郎の研究への森鷗外の嫉妬と排斥

柴三郎がコッホ博士の下で研究した期間は1886年から1892年1月迄である

1887年森鷗外はコッホの門を叩いた。コッホ博士は弟子入りを承認をしたが、条件は北里柴三郎の元で働くことで許可された。与えられた研究課題にも不満を持っていた森鷗外は1年足らずで辞めた。

1888年に柴三郎が先輩緒方正規の脚気細菌説批判（実証的は栄養不足ビタミンB）を勇気を出して決行した。北里への攻撃は、帝大医学部を中心に文部省・帝大医学部と関係が深い陸軍医務局に飛び火した。その急先鋒に森鷗外がいた。森は生涯、脚気細菌説を曲げなかった。その結果日清戦争で患者数34,783人（死亡者3,944人）日露戦争で患者数211,600人（死亡者27,800人）、いずれも陸軍での患者、陸軍では精米した白米を主食としていた。ビタミンB2不足によるとされている（日本脚気物語がある）

##### ②北里柴三郎の多数の功績とコッホ博士の驚き

1889年(36歳) 北里柴三郎は破傷風菌の純粹培養に成功する。1889年(36歳)

多くの世界の学者が未踏であったので、コッホ博士は「もしーもし北里君が破傷風菌

の純粋培養に成功したなら、これは細菌学界において最高の勲章に値するものである」と珍しく興奮して言った。柴三郎は寝食をわすれ実験、研究に勤しむこと1年、破傷風菌の純粋培養に成功した。世界初の偉業の達成であった。

1889年（明治22年・36歳）4月27日第18回ドイツ外科学会で「破傷風の病原体について」と題して講演し、世界に破傷風菌の純粋培養を伝えた。

1890年抗毒素、「抗体」の発見と治療法の発明。1890年（37歳）

「破傷風免疫動物の血清のなかには、破傷風の毒素に対抗してこれを無害にする物質がある」ことを確認した。この物質を「抗毒素」と名づけた。今日でいう、抗原抗体反応の「抗体」にあたる。柴三郎は世界初の抗体発見者である。

コッホ博士はただ驚くばかりであった。そして、これは「免疫血清療法的基础」となると考えベーリングと共に実験を続けるように指示した。

### ③エミール・ベーリングの受賞

エミール・ベーリングは1889年コッホの元にきて、ジフテリアを研究していた医学者であった。柴三郎が発見した破傷風の抗毒素の研究をジフテリアに応用するというのがコッホの指示であった。二人の研究は、「免疫血清療法」の夜明けを告げる。

1890年（明治23年・37歳）12月「動物におけるジフテリア免疫と破傷風免疫の成立について」共著論文を「ドイツ医事週報」に発表した。世界に向け「血清療法」を発表したのである。（1901年ベーリングは第1回ノーベル医学・生理学賞を受賞）

### (6)米国との密約者がノーベル平和賞を受賞

これらと対照的に早々にノーベル平和賞を授与されたのが元首相の佐藤栄作である。

1974年環太平洋地域安定化とNPT署名。非核三原則を提唱したことによる受賞。

但し、1972年、佐藤栄作は有事の際に米国が日本に核持ち込みを認める密約をしていたのである。この時にはノーベル平和賞への評価が大揺れに揺れた。

非核三原則とは、

核兵器を持たず、作らず、持ち込ませないという日本政府の原則。

1967年に佐藤内閣が表明し、1971年に国会で決議され、国是として堅持されている。

NPTとは核兵器不拡散条約、2021年時点で191カ国・地域が締約国となっている。世界最大の核軍縮の国際枠組みとなっている。

このようにノーベル賞にノミネートされるには国内の評価と政府の後押しが必要であるが日本政府は（日本被団協）を北里柴三郎の時と同じように敵視に似た態度であった。

その裏には更に日本が2017年の核兵器禁止条約（核兵器の保有や使用、威嚇を禁じた国際条約、署名国は100カ国に迫る。）に署名していない後めたさもあるのだろう。

しかし、一番の理由は米国への忖度であり、唯一の被爆国であること（しかも3回もアメリカからの行動による）を堂々と主張できず、核抑止への国際的な動きに積極的になれないジレンマにある。

田中さんの発言にはこの歴史が重くのしかかっていることを私たちは知る必要がある。

### 3、「人道イニシアチブ」に認められた受賞

今回の受賞には日本政府よりも世界的な「人道イニシアチブ」の主導が大きいと思われる。「人道イニシアチブ」とは、人道的な観点から核兵器が人々に与える影響を考慮し、核兵器の廃絶を推進する運動、またはアプローチ。核兵器の使用は国境を越えた甚大な被害を及ぼすものであり、いかなる国や国際機関も人道支援が必要なこと、そして、核兵器の使用は、いかなる意味でも国際人道法に合致しないという考えに基づく運動のこと。

#### (1)アレクサンダー・クメント氏

核兵器禁止条約は2017年7月7日国連で採択され、2021年1月22日に発効となっている。この要約の前文に「ヒバクシャ」という文字が採用された。その採用に尽力したのがオーストリアのアレクサンダー・クメント氏であった。

彼を動かしたのは被爆者の代表的存在であった谷口稜嘩さん（1929-2017）との出会いである。2010年5月日本被団協を代表して国連本部で核不拡散条約再検討会議で谷口さんが演説をされた。この演説内容に動かされたのが当時オーストリアの外交官であったクレメントさんである。彼は2014年8月谷口さんに再会するために被爆地を訪問した。

2022年6月23日核兵器禁止条約第一回締約国会議の議長を務めた人である。

核兵器禁止条約の前文は次のように始まっている。（一部を抜粋）

#### 【前文】

本条約の締約国は、国連憲章の目的と原則の実現に貢献することを決意する。

核兵器のあらゆる使用によって引き起こされる壊滅的な人道上の結末を深く懸念し、核兵器を全廃する必要があると認識する。全廃こそが、いかなる状況でも核兵器が二度と使われないことを保証する唯一の方法である。

事故や誤算によって引き起こされたり、意図的に起こされたりした核兵器の爆発を含め、核兵器が存在し続けることで生じる危険性に留意する。こうした危険性は全人類の安全保障に関わり、全ての国が核兵器のあらゆる使用の防止に向けた責任を共有していることを強調する。

核兵器の壊滅的な結末は十分に対処することができず、国境を越え、人類の生存や環境、社会経済の開発、地球規模の経済、食料安全保障および現在と将来の世代の健康に重大な影響を及ぼし、電離放射線の結果によるものを含め、女子にとりわけ大きな影響を与えることを認識する。

核軍縮は倫理的に必要不可欠だと認め、国家安全保障と集団安全保障の利益にかなう最上位の国際的公益である核兵器のない世界を実現し、維持する緊急性を認識する。

核兵器の使用による被害者(ヒバクシャHibakusha)と核実験によって影響を受けた人々にもたらされた受け入れ難い苦しみと危害に留意する。

核兵器に関わる活動が先住民に与えたとりわけ大きな影響を認識する。

全ての国は国際人道法や国際人権法を含め、適用可能な国際法を常に順守する必要があることを再確認する。

条約は核の使用だけでなく開発や保有、使用の威嚇といったあらゆる「核のタブー」を含んでいる。現在の批准国は73カ国、日本は批准していない。会議へのオブザーバーとし

ての参加も国会で問題になっているにすぎない。今回のノーベル平和賞受賞に対する世界の期待を唯一の被爆国日本国はその呼びかけに応えなければならない。

## (2)ヨルゲン・ワトネ・フリドネス氏

今回の受賞を決定的にしたのは今年からノルウェー・ノーベル委員会会長になったヨルゲン・ワトネ・フリドネスさんの選考視点である。彼は「記憶の継承」を重視したという。授与の理由の一つにも次のように明らかにしている。

「いつの日か、私たちのなかで歴史の証人としての被爆者はいなくなるだろう。しかし、記憶を残すという強い文化と継続的な取り組みで、日本の新しい世代が被爆者の経験とメッセージを継承している。彼らは世界中の人々を刺激し、教育している。それによって彼らは、人類の平和な未来の前提条件である核のタブーを維持することに貢献している。」

「記憶こそが『歴史の過ちの繰り返し』を避けることにつながると信じている」と言われる。彼もまた「人道イニシアチブ」の主導者の一人である。そして個人の力を勇気づけている。「アルフレッド・ノーベルのビジョンの核心は『個々人』が変化をもたらすことができる」「被爆者たちも間違いなく、過去にも、現在にも、変化をもたらしてきた」と今回の日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）ノーベル平和賞授与がもたらす世界の変化（核兵器禁止）を期待されているのだと思う。

「核兵器の全廃は非現実的だ。」という反論に対して彼はこのように応えている。

「核兵器に安全保障依存する世界でも、文明が生き残ることができると思う方が、よほど非現実的ですよ」と応えている。同じような答えを出す日本人も少数ながら存在する。勇気づけられた言葉である。

## 4、優先すべきは軍備費増強よりも原子爆弾消滅費の創設

今やまさに、核兵器が使われそうな雲行きになっている。大型の原子爆弾は使用できないとって原子爆弾が小型化した時期もあったが、今では中型化したと喧伝し脅威を振るっているのが最近のロシアの指導者である。広島、長崎に落とされたのは小型の原子爆弾で現在のものはその数十倍になると言われている。中型とはどんな規模なのだろうか。被害が自国には及ばないとでも言っているように思われる。世界はチェルノブイリの事故の教訓を忘れていない。東日本大震災の福島事故さえも過去のものになりつつあるのか。核の消滅にどれほど時間を要するか。足元の危険を忘れ更に危険の貯蓄を続けている。

核兵器を全廃するには時間がかかるだろう。全廃しても今既に保有している爆弾の処理をどうするか、研究者はその始末する方法を確立しなければならない。国防費を原爆消滅費として予算だてをする必要があるのではないか。将来の国際連合の仕事はこの処理費を各国に割り当てることになるだろう。一発も使われないうちに

そして日本被団協のノーベル平和賞は「記憶の継承」のモデルとして日本国民は語り継いでいきたい。核兵器禁止条約の批准国になる運動も個人ベースでも続けたい。



# パリ通信・第156号

## 最後の自画像「聖ウルスラの殉死」

### 1、パリ・ノートルダム大聖堂の再建

12月7日パリ・ノートルダム大聖堂の再建記念式典が行われた。2019年4月15日夜中燃え続けたノートルダム大聖堂。僅か5年8ヶ月で再び一般公開できるまでに至ったことは驚くべき速さだった。世界中から寄せられた8億4千6百万ユーロ(=1400億円)の修復寄付金があつてのことではあるが、860年前に建立が始まったノートルダム聖堂建築を今なお再現できる技術を有する石工、大工、屋根吹き職人、ステンドグラス職人、彫物師等の技が健在である証だろう。7日の式典にはマクロン大統領夫妻とフランス全土の司教170名を始めヨーロッパ各国首相、トランプ次期大統領、ゼレンスキー大統領など政治色豊かな再建式典が行われた。西門に置か



れ、火災は免れたものの傷んだ大パイプ・オルガン(1733年製造、1868年カヴァイエ・コル再製: 115本の音栓と7952本の代償さまざまなパイプ)も一本一本解体、修理、修復された。テレビ中継を見るだけでも見違えるように美しくなった内部。何世紀もの汚れが落ちて白さが蘇り、建立当時の赤、青、黄色が違和感を感じるほど美しい。生まれ変わった

ノートルダムを見に行こうと気楽に考えていたが、世界中から殺到する人でやっと17日15日見学できた。1時間以上寒い外に並ぶのは大変だった。

マクロン大統領はパリ・ノートルダム大聖堂再建記念式典にローマ法皇フランシスコを招待し



たが断られた。カトリック教徒の拠り所となってきた大聖堂の再建を祝福して然るべきと期待されていたが、法皇はパリではなくコルシカ島アジャクシオを公式訪問し、15日朝地中海文化を共有する地を意識した平和を願う日曜ミサを行った。歴史的にフランス系法皇は数多く、ヨーロッパの政治と宗教に大きな影響を与えてきた法皇の権威、権力、地位が変わったことを象徴するように感じた。

## 2、カラヴァッジョの自画像と聖ウルスラの殉死

今夏からカラヴァッジョを見に行ったシチリア島とナポリ。ローマ法皇や枢機卿の後ろ盾がなければカラヴァッジョの作品はあり得なかった。二十歳でミラノからローマに移ったカラヴァッジョが目にしたのは、貧困に生きる庶民と彼らが心の拠り所としている信仰、その対極にある法皇の富と権力。17世紀初頭、僅か20年の作品に込められた意図、意義、斬新さ、強さには圧倒させられるばかりである。写真技術ができてから肖像画は廃れていく一方だが、自画像を描かなかった画家はいない。ルネサンス期には場面の証人として自画像が描かれることが多い。カラヴァッジョの場合は特に象徴的な例だろう。1606年ローマで絞首刑を宣告されたカラヴァッジョの一縷の望みは法皇パウルス5世(在位期間1605-1621)の「恩赦」である。逃亡者となりマルタ島を目指したのも「マルタの騎士団」に入団し法皇に恩赦を乞うためだった。



マルタ島で「エルサレムの聖ヨハネ会」(1530-1798)に入団し、教会祭壇に「洗礼者聖ヨハネの斬首」(361 x 520 cm)(マルタ島ラ・ヴァレッタ教会)を描いている。しかし思うように事は運ばずマルタ島を脱出し、シチリア、ナポリ、フィレンツェ経由でローマ法皇の恩赦を懇願し続ける。

1610年「ゴリアテの首を持つダヴィデ」(125 x 101 cm)に描かれたゴリアテはカラヴァッジョの自画像だ。ローマ・ボルゲーゼ美術館に所蔵されているが、法皇パウルス5世の甥ボルゲーゼ枢機卿に恩赦の仲介を乞うものである。若きダヴィデに首を落とされたカラヴァッジョ、その剣の刃には「H-AS OS」の文字が読める「Humilitas Occidit Superbiam」(謙虚さが傲慢を殺す)(聖アウレリウス・アウグステイヌスのモットー)。殺人を犯したカラヴァッジョの首は落とされ、謙虚に改悛するというメッセージである。

「ゴリアテの首を持つダヴィデ」



そして当時の手紙や資料で裏付けることができるカラヴァッジョ最後の作品「聖ウルスラの殉死」(1610)(ナポリ、Intesa Sanpaolo銀行所蔵)に最後の自画像がある。この作品(次ページ)は写真からも分かるように保存状態は良くない。ジェノバ総督の息子マルカントニオ・ドリリアが仲介者を通じて発注した。ドリリア家の嫁になる娘ウルスラに贈るために題材も指定



されていた。急いでいたように絵の具が乾く前に仲介者の手に渡り、1610年6月18日ジェノバに到着する。その後ドリリア家に保管されていたと思われ、1832年ナポリのドリリア邸にあり、1973年売却された。聖ウルスラは4世紀ブルターニュ半島の王の娘に生まれ、一万一千人の娘を伴ってローマ巡礼の旅に出たと言われている。途中異教徒フン族の長アッチラに捕らわれ、アッチラの求婚を退

け、ケルンで弓矢を受けて殉死する。分かり難いがテント内最期の劇的な場面である。アッチラが引いた弓矢はウルスラの胸を貫いている。胸を押さえるウルスラの白い顔は血の気が引いてすでに息絶えている。そのウルスラの背後にカラヴァッジョ最後の自画像が描かれている。ウルスラと共に弓矢に命絶えた穏やかとも見える表情である。1610年7月18日フィレンツェ近くの浜で絶望のままマラリア熱で息絶えた38歳のカラヴァッジョ。その数週間後にローマ法皇パウルス5世の恩赦を告げる手紙が届く。なんと数奇な運命だろう。（古賀順子記）